

### 3. 日本社会における学歴アノミー

米川茂信 1995 『学歴アノミーと少年非行』学文社。

#### 3-0. 学歴アノミー

・・・学歴アノミーとは、より高くより良い学歴（ないし学校歴）の達成が、けっしてすべての生徒にとって可能ではないにもかかわらず、すべての生徒に対し、最大の努力をもって追求すべき目標として文化的に一とくに社会の集合意識や常識によって一価値づけられ、強調されているような学校社会を中心に形成された社会状況を示している。（米川[1995:14]）

→「現代日本社会の高学歴化傾向の逆機能的な社会状況に言及するために」、「構成された概念」。

##### ①手段としての学歴

→単なる学歴（高卒／大卒か）よりも学校歴（どの大学か）が焦点となっている

##### ②手段価値の高い大卒学歴

→学歴主義を背景に獲得が困難になっている

##### ③大学進学 of 常態化

→学歴偏重主義の反映

##### ④偏差値による序列化

→結局のところ、大卒学歴の価値は、入学試験時の偏差値によって計られている

##### ⑤高卒の学歴

→大卒学歴との連動（手段価値＝普通科／職業科、目標価値＝高校入試の偏差値）

##### ⑥高校進学 of 義務化

→事実上の義務化

##### ⑦過熱する受験競争

→同一レベル内での競争も激化し、学歴のない者への否定的な評価が加えられる

i. 入りたい学校よりも合格できる学校へ

ii. 学校の授業も受験中心に

iii. 偏差値による一元的な生徒評価

iv. 学校嫌い／不登校などの問題

v. 受験に向けた勉強中心の生活体系の強制

vi. 教育費の高騰と階層格差の激化

#### 3-1. 文化的目標としての学歴

##### □一般的な文化的目標

現代日本社会における価値実体（文化的に価値づけられ、その達成のための努力が規範的に強調されている目標価値）とは何か。

方法：いわゆる内容分析

新聞広告に掲載された単行本や雑誌等の出版物の題名、その内容や目次などを示している見出し、その内容についてのコメント・解説・紹介などの記事等にみられる語句とその文脈から把握する

- ①現代日本社会における主要価値実体は、地位、富、学歴、業績、能力などである。
- ②このうち、目標価値として文化的に価値づけられているのは、地位、富、学歴、業績である。
- ③以上、4つの目標価値は、成功目標ともなっている。
- ④また、それらは、人々の欲求ないしこれを規定する価値観の規準として機能している。
- ⑤4つの目標価値は、それを達成すべく努力することへの文化的強調が、顕在的、潜在的に行われている。
- ⑥この文化的強調は、一種の規範的性格をも内在している。

### □中高生にとっての文化的目標

方法：質問紙調査（中高生から成人までの調査）

- ①中高生の場合、上記4つの目標価値のうち、地位、富、学歴を文化的目標として認知している。また、認知度としては、とりわけ地位と学歴が高い。
- ②制度的規範としては、業績主義的規範と学歴主義的規範が浸透している。ただし他方では、結果主義的規範が浸透しており、かつ平等主義的規範は浸透していない。  
→相反するはずの業績主義と結果主義が共存している、つまり、葛藤状況にある。  
※文化的目標を肯定しながら、その達成のための制度的手段が制約されている場合、革新的適応態度をとりやすい傾向にある。

- ③マートンの類型論にはないタイプ（価値的革新）が見受けられる。  
cf. 価値的革新とは、文化的目標に質的にとって代わる他の目標価値（「社会のために役立つことをする」、あるいは「能力を通して才能を伸ばす」）を、現行の制度的手段によって達成しようとする適応様式。米川氏考案。  
→おそらく、文化的目標／制度的規範／制度的手段の三つを要因として分析したため、細かくなったのではないと思われる。  
※ただし、儀礼主義と何が違うのかわかりません(^\_^;)

- ④この調査では、同調が中学生で2割、高校生で1割程度にとどまり、文化的目標を放棄、あるいは拒否、切り下げている中学生が7割、高校生が8割、制度的手段を拒否するものが、中学生で3割、高校生で4.5割存在する。

### □中高生の学歴アノミー

方法：質問紙調査（一般的な中高生といわゆる「非行少年」）

#### ・進学目標の文化的目標としての圧力

二つの経路を通して圧力が加わる

- ①学校社会の雰囲気、教師の指導、友人とのコミュニケーション
- ②親からの期待

・学歴アスピレーションの達成を困難とする状況とその対処

cf. あくまでも 1990 年代当初の話です。なお、アスピレーションとは「進学目標の達成志望」あるいは「進学目標の内面化」という意味だそうです。

マートンのいう「制度的手段」がどれくらい確保されているか。

→諸統計（学校基本調査など）によれば、4年制大学への志願者数と実入学者数を比較すれば、39.5%が入学できない

※さらに、①両親の有無（いわゆる「欠損家族」で）、②父親の職業（「ブルーカラー」）、③父親の学歴（低くなればなるほど）のそれぞれにおいて、非行少年の学歴アスピレーションは、「著しく低い（米川[1995:317]）」。

このような状況での対処法として考えられるのは、固執か放棄。

→固執している、つまり学歴アスピレーションを保持したままの非行少年の状況

※否定的自己観念を持ちやすく、さらに一般少年以上に親からの圧力を受けていると感じる。すなわち一般少年以上に、学歴アノミー状況にさらされている。

・学歴アスピレーションの非行抑止機能

前歴なしの中高校生非行少年と一般少年を比較。

	中学生					
	男子			女子		
	一般	非行少年		一般	非行少年	
		無	有		無	有
大学まで卒業	82.9	27.9	9.3	72.0	11.9	0.0
高校まで卒業	14.6	46.8	44.0	24.8	42.9	22.2
高校へも進学しない	2.5	25.3	46.7	3.3	45.2	77.8
サンプル数	316	158	75	303	42	9
	高校生					
	男子			女子		
	一般	非行少年		一般	非行少年	
		無	有		無	有
大学まで卒業	86.6	41.0	5.9	82.4	24.7	0.0
高校まで卒業	13.4	59.0	94.1	17.6	75.3	100.0
サンプル数	292	144	34	370	77	4

→どの属性においても、前歴なし非行少年における学歴アスピレーションが「著しく低いことがわかる（米川[1995:228]）」。特に、中学生での「高校へも進学しない」という完全な放棄の多さが目立つ。

※学歴アスピレーションの放棄がいつその非行化（累非行化）も示している。つまり、学歴アスピレーションの非行抑止機能が検証された。

①生活目標一般と特殊進学目標の非行抑止機能

- ・非行少年は、生活目標一般に内面化がなされていない。

→「しかし、個人的目標のうち人間関係重視的目標は、非行少年に比較的内面化される傾向にある（米川[1995:327]）。」

- ・生活目標の放棄ないし非内面化が少年の非行化を促進している。
- ・学歴アスピレーションを放棄した少年が、薬物非行や前歴ありの少年において多い。
- ・学歴アスピレーションの放棄が、文化的目標の内面化と関連する（非行少年、特有の傾向）。
- ・一方で、大人社会の文化的目標を内面化することによって、現実社会にとどまろうとする社会的適応が示唆されるが、他方で、矛盾した状況に直面して、さらなる非行化が促進される。
- ・学歴アスピレーションを放棄した非行少年であっても、有職者は文化的目標を内面化する者が多く、薬物非行の少年が少ない。

②大学進学目標の逸脱抑止機能

- ・本人が大学進学目標を内面化していないにもかかわらず、親が大学までの進学を期待している場合、逸脱行動は促進されやすい。
- ・本人が大学進学目標を内面化している場合、男子では、自分が所属している高校の大学合格者率が低いと、逸脱行動が促進されやすい。他方、女子では、自分が所属している高校の大学合格者率が高いと、逸脱行動が促進されやすい。

これは、ある面では、帰属学校の大学合格者率の高さが、より偏差値の高い大学への進学を男子についてと同様に女子にも当然視するような外的圧力をいっそう高めることによって、大学進学に関する現代日本社会の女子に比較的不利な諸条件との間に社会構造的な緊張が生み出されるからだと推察される。（米川[1995:332]）